

全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会 ～結成までの物語～

子宮頸がんワクチン

グラクソ・スミスクライン社のサーバリックス。メルク(MSD)社のガーダシル。この2剤が、日本では通称「子宮頸がん(予防)ワクチン」と言われています。

今でこそ、このワクチンが、多くの少女や女性たちに不可解な薬害をもたらしているのではないかと、因果関係が認められない中でも言われており、日本では大きな社会現象になっています。

海外でも多くの被害が報告されていますが、その被害を訴える力は弱いままでした。大きな被害者団体は、唯一日本だけです。まさに、全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会が被害の実情を明らかにし、世界を牽引しています。

被害のセンセーショナルな動画を世の中に大きく紹介したのも、世界で初めてのことでした。その動画を見た、海外の被害者の方が、なるほど、動画で実情を知らせればいいのかと、同じように動画をたくさん紹介するようになりました。

娘の副反応

子宮頸がんワクチン接種録

2011年9月16日 サーバリックス一回目

2011年9月29日 日本脳炎ワクチン(追加分)

2011年10月19日 サーバリックス二回目⇒この直後から娘に異変が!

注射針を刺された時は問題なし。薬液が入って射ち終わったとたん、しびれと違和感。すぐさま医師に「接種したら何だか痺れておかしい」と告げるが「様子を見てください」といわれ帰宅。帰宅後には次第に痛みが強くなる。

熱と吐き気、だるさと痺れ。そして射った方の腕が明らかに赤く全体的に腫れ上がり、翌日接種医の元を受診。

医師から「うちでは手に負えません。今すぐ総合病院に予約をいれますから、すぐにそちらに行ってください」といわれ、そのまま入院となる。

接種した腕はアロディニア(灼熱痛・CRPS 複合性局所疼痛症候群)と診断され、痛みで動かすこともできず、リハビリも出来ない状況。

熱と吐き気は続き、全身に動き回る痛みも出現。脚にも痛みが出て、歩くのも辛くなる。明らかにワクチンの副反応を医師は疑った。

後に、薬液による副反応であるという診断書も、この総合病院から出された。

10日間入院。改善せず、痛みの治療のため、退院後の足でそのまま大学病院受診。麻酔科の痛みの治療を受けることにしたが、検査をただで返され、その頃には痛みがひどく5分も歩けない状況に。翌日には痛みで歩けなくなる。麻酔科に問い合わせるも、灼熱痛であるCRPSという病態は考えられないので診ることができない。不可解なので、元の病院に戻れと言われる。

再び元の病院で紹介状を書いてもらい、別の大学病院へ。CRPSという病態は考えられず、小児は麻酔科で見る様な事もないので、同病院の小児科の紹介状を渡され、再び別の日に小児科へ。検査もせず、5分ほどの診療で、車椅子の娘を前に、痛みのひどい腕をこねくり回して、「学校に行きたくなかっただけ。ワクチンがいいきっかけになっただけだね。いい精神科があるからそっちへ行ってみ

たら?」と言われ診療終了。私は寝たきりになった娘の車椅子を押し、泣きながら帰宅した。その後、いくつもの病院を受診。その数は18病院にのぼる。

娘に出た症状及び診断

頭痛、吐き気、熱、痺れ、全身の動き回る強い痛み(疼痛)、接種した腕全体が腫れ上がる、CRPS(複合性局所疼痛症候群)、光が眩しい、ひどい皮疹、脱毛、嚥下障害、体全体のコリ、腹痛、便秘と下痢を繰り返す、尿が出ない、味覚障害、口内炎、接種した側の背中と肩の盛り上がり、解離発作、複視、眼振、むずむず脚症候群、足裏の腫れ、筋肉痛、関節痛、睡眠障害(眠れない)、レム睡眠行動障害様症状、心臓の痛み、低血圧、貧血、不安発作、化学物質過敏、電磁波過敏、手のひら・足裏の皮膚がズルズル剥ける、視野が全て緑色になる、痙攣、自傷行為、暴れる、解離性人格障害、など

「みかりんのささやき」というブログについて

サーバリックス接種直後から、娘の副反応が現れた。ワクチンの副作用だと誰もが分かるような事例であったため、その詳細を書き留めておく必要に駆られていた。主人が、「ワクチンの被害であるということ、多くの人目に触れてもらえるように、ブログに書き留めるべき」と言うのを受け、ブログに症状や区の対応なども含めて、書き留めるようになり、毎日ほぼ更新するように努めた。元々、小さな地域新聞社の記者をしていた経験があり、その後働きながら児童文学を学んでいる最中の出来事だった。日本児童文学者協会の会員にもなり、児童文学の同人誌に掲載されるなど、していた矢先のこと。ブログをパディントンデザインのデザインにしたのは、このワクチンがパディントンが同じイギリス生まれだったからという理由。

パディントン ベア
Paddington Bear™

みかりんのささやき
～子宮頸がんワクチン被害のブログ～

私の娘が子宮頸癌予防ワクチン「サーバリックス」接種直後から熱や吐き気、痛み痺れが現れ、片手、両足が疼痛に。そのままCRPSに移行しました。CRPSは治ったものの、今は副作用などと戦いながら少しずつ治癒に向かって邁進する日々です。

最新の記事

- やっぱ、良くなっている
- 歩み
- 靴下が履けた
- なぜ被害者連絡会が反ワクチン団体だと?
- 子宮頸がんワクチン接種後に症状が出た方への相談窓口設置へ
- 10歩前進かも
- 救済の流れ
- 三原議員からのご連絡

プロフィール

みかりん
プロフィール | ビッグ部屋
なる | グルっぽ | ベア

性別: 女性
自己紹介: 今は主婦。娘の病状が治ったら、即仕事する。まあ、主婦って柄じゃないね。今まで保険会社の事務、生活係... [続きを見る](#)

[このブログの読者になる](#)

[読者になる](#) [メンバーになる](#)

被害者連絡会に必要なだったもの

- ・複数の被害者
- ・子宮頸がんワクチンの副反応が薬液によるものであるという確証(診断書)
- ・支援者(池田利恵議員をはじめとした自治体のサポート議員の方々)
- ・被害を訴える顔の出せる人
- ・重篤な副反応被害者がいるという大きなニュース

全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会ができるまで

- 2011年10月19日 ブログ「みかりんのささやき」開始
- 2012年夏頃 宮城県大崎市の佐藤壮太郎先生と副反応の件でやり取りをはじめ
- 2012年12月 池田利恵議員よりブログを通してメッセージが来る
- 2013年1月 池田議員、「子宮頸がんワクチン事件」著書の斎藤貴男さんと池田議員の事務所で初めてお目にかかる
- 2013年2月7日 杉並区で補償すると言っていたのが一転、補償できなくて困りましたと言われる。その夜、区内のワクチン導入経緯を調べるため、杉並区議会の議事録を読みあさる。そこに、曾根文子議員の「導入後に副作用患者がいるか」という質問に対して、菓子折りを持ってお見舞いに来ていた杉並保健所所長が「重篤な副反応患者は居ない」と発言している記述を見つける。
- 2013年2月8日 曾根議員の事務所に電話し、副反応で一年以上学校に通えてない現状を話す。後日、被害の実情を話し、副反応は薬液によるものであるという診断書を添えて、3月の議会で質問してもらおうよう何度か打ち合わせをする。池田議員も杉並に足を運び、このワクチンの導入に関する説明や疑問点を曾根議員らに説明した。
- 2013年3月7日 曾根議員が杉並区議会において、このワクチンの重篤な副反応被害者が区内におり、その被害が保健所所長によって故意に隠されていたと指摘する。この日、私も区議会を訪れ、朝日新聞記者の斉藤智子さんの取材を受ける。
- 2013年3月8日 子宮頸がんワクチンの被害者がいたと、朝日新聞のニュースになり、世間も大きくニュースにする。杉並区では、この報道で問い合わせが殺到し、プレスリリースを出し、被害救済するという声明を発表した。
- 2013年3月11日 子宮頸がんワクチン被害者が初めて、池田議員の呼びかけにより、日野市において顔を合わせる。(5名の被害者の親が集い、NHKなどのインタビューに応じた)賛同する自治体議員も10名程顔を揃える。取材に来ていた記者から「患者会は作られるのですか?」という質問が飛び、そのまま「全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会」という名称を決め、患者会結成のために動き出す。
- 2013年3月25日 千代田区星陵会館にて、全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会設立記者会見。この前日まで、代表となる松藤が本名と顔を出すべきかどうか、非常にもめ、最終的に朝日新聞の斎藤記者から「顔を出さなければ、実際の被害を訴えることができませんよ」という一言で、顔を出すことを決めた。当時の記者会見では、松藤だけが真正面を向き、あとの4人の親御さんは背中を向けて記者会見をするという状況であった。

予防接種の補償に関して

今まで、各自治体の予防接種にまつわる行政は、副反応における対応をほとんどしてこなかったという実態が明らかにされたのではないだろうか。

杉並の事例をとってみても、保健所の担当者は、救済・補償が受けられるので、今までかかった金額は交通費も含めて全て保管しておいて欲しいという対応をしていた。

しかしながら、いざ救済の手続きをしてみると、担当者が「PMDAで全て網羅してもらえるのかと思っていたら違っていました」というような言葉になり、「大変なことになりました。お金が出ないんですよ。手続きは自分でしてください」と、今まで言っていたことが突然覆される。

つまり、見越していたものが見越せなかった。今までやったことがなかったの、知らなかった。こういうことである。

今まで数多くの予防接種がある中、実際に副反応が起き、救済されたという人は少なく、担当者もほぼ対応したことがない状況だったはずだ。

本当に被害にあった人が、小児の突然死といった分類になり、救済がされてこなかった可能性が大いにある。中高生の子どもよりも、生まれたばかりの小児は、いかほどの免疫やカラダの機能が備わっているのだろうか。少女たちよりもずっと免疫は脆弱ではないだろうか。

自分の体調をしっかりと言葉にできる中高生の接種で、ワクチン副反応の救済問題は、制度や因果関係の審査の仕方にも大きな一石を投じた。ワクチンのせいなのに、ワクチンのせいにしてもらえずに泣き寝入りしている人たちはもっというはず。

しっかりと、救済する。その取り組みは今後の国と自治体の課題になるだろう。

無過失補償制度は、良い取り組みだと思うが、海外の内容を見ると、薬害に該当するにもかかわらず、その補償内容は、決して満足のものではない。つまり、補償が極端に少ないという。

公衆衛生の予防という枠組みの中で、副反応というのは、いわば大衆の中で起きる犠牲であるからこそ、その補償は満足のものではない。